Monterey の思い出

——*Cannery Row* について——

中地　晃

I

Cannery Row(1945) についての批評家の論文には，論旨が不明確で散漫なものが多い。*East of Eden*(1952) は駄作であるという激しい意見を持つ French でさえ，その *Cannery Row* 論は歯切れが悪い。彼はこの作品は誤れる世間に対する Steinbeck の忠告の手紙だと言い，作者の攻撃目標は respectability である[1] と述べて論を始めるが，主筋の間に散在する多様な挿話から成る中間章の説明に入り込み，その二三ケ所で respectability への攻撃を指摘はするものの，各挿話の意味があまりにも変化に富むため，当初の意気込みは消え，結局この作品は芸術の助けで自らの周囲に打勝つことを学んだ男の物語であり，創造精神の弁護であり，詩の弁護である[2] などと方向を変えてしまう。

Liscaもこの作品が真面目な意図を持つ社会批判の書であるとしながら[3], mutual benevolence のテーマとか，prostitution の問題とか，中間章の役割とかに力を入れ，中心人物の一人である Doc の説明に移って論を終える。

Steinbeck の各作品について比較的穏当な意見を述べる Watt も，この作品は現代アメリカ生活への諷刺であると始めるが[4]，*Cannery Row* の多様な人物を概観した後で，そのなごやかな社会は，商業化されたアメリカ生活の孤独への一種の答えであると後退し，さらに，Cannery Row の中にも孤独があると言いはじめ[5]，独りでサンスクリットの詩の訳を読む Doc の描写をそのまま写して結びとしている。

同様な傾向は，Paul McCarthy や Richard Astro, や Lester Jay Marks ばかりでなく，難解な Fontenrose にさえ見られるが，ここに *Cannery Row* の問題点があるように思われる。

II

Cannery Row について先づ気づくことは，同じ Monterey を舞台とする *Tortilla Flat* (1935) との類似であり，多くの批評家もそれに触れている。

二つの作品は，構成が loose で細い糸のような筋を持ち，挿話的な中間章で分断されているこ

とと，社会に背を向けた一群の人間が hero として行動し，それが社会批判となっていることを Lisca は述べる[6]。大まかに見れば確かにそう見えるが，仔細に見れば重大な相違に気がつく。

Tortilla Flat においては，paisano である Danny と彼の仲間は，怠惰で働くことをせず，盗みや詐欺や物乞いによって暮しているが，必要以上の欲望を持たず友情に厚いために，幸福な満足した生活を送るのであり，商業主義に汚されない彼等がわれわれより平和で幸福な生活をする姿を通して，文明人や現代文明生活が諷刺されるのである。

一方，*Cannery Row* では，Mack と彼の仲間が登場するが，彼等は paisano ではなく，もとは空地の鉄管に住んだ白人浮浪者である。怠惰で友情深い点は Danny と彼の仲間と同じであるが，Mack と彼の仲間の行動には奔放さがない。Danny 等は，窃盗，詐欺，横領，姦通を天真爛漫にやってのけ，現実を超えた奔放な行動の持つ美しさと現実批判を漂わせるが，Mack とその仲間の悪行はほとんど描れない。Mack 等が家賃を払わないこと，ストーブの代金を払わないこと，蛙を担保として借りた金を返さないこと，Eddie が車の部品を盗むこと，頭の弱い Frankie が時計を盗むこと，パーティーをしようとして Doc の研究室を荒すことなどが，彼等の悪行のすべてであるが，Frankie は捕まり，Mack は Doc に殴られるなど，彼等の悪行は数が少ないだけでなく現実レベルを超えることはない。このような Mack とその仲間の行動からは *Tortilla Flat* におけるのと同じ意味での社会諷刺は生れないのであり，そこに社会諷刺があるとしても強いものではなく，言葉の一部か，Mack 等の行動とはあまり関係のない中間章の一部に見られるに過ぎない。この作品で Steinbeck は respectability を攻撃しているという French が見つけたのは，そのような場所のいくつかに過ぎず，しかも，こじつけの感じのする場所が多い。例えば，8章でボイラーに住む Sam Malloy の妻が，窓もないのにカーテンを欲しがる話で，Mrs. Malloy は respectability の奴隷になっているとか，respectability は人間を奴隷にするとか French は述べたてるが[7]，説明に少し無理があるように思われる。

つまり，*Tortilla Flat* の社会諷刺は，Danny 等の考え方や行動を通して表現されているのに対し，*Cannery Row* に於ては Mack 等の描写は不十分で，社会諷刺を必ずしも表現していない。しかし Steinbeck は Danny 等について述べたのとほとんど同じことを，Mack 等について述べている。

> They are the Virtues, the Graces, the beauties of the hurried mangled craziness of Monterey and the cosmic Monterey where men in fear and hunger destroy their stomachs in the fight to secure certain food, where men hungering for love destroy everything lovable about them.[8]

作品の主要人物の一人である Doc も Mack 等について次のように述べる。

"...Look at them. There are your true philosophers. I think," he went on, "that Mack and the boys know everything that has ever happened in the world and possibly everything that will happen. I think they survive in this particular world better than other people. In a time when people tear themselves to pieces with ambition and nervousness and covetousness, they are relaxed. All of our so-called successful men are sick men, with bad stomachs, and bad souls, but Mack and the boys are healthy and curiously clean...."(9)

この Doc の言葉は勿論作者の言葉であるが，Mack 等が the Virtues, the Graces, the beauties of Monterey であることや，healthy で clean あることは，作者が述べているだけで，Mack 等が Doc のためにパーティーをすることを中心とする行動の描写によって描かれることはない。Mack 等は Danny 等の持つ明るさを欠いており，Frost が Doc に答える言葉の方が作品の現実に近い。

"I think they're just like anyone else. They just haven't any money."(10)

Mack 自身パーティーの失敗の後で，Doc に次のように語るが，これも Mack 等の現実を示している。

"...I been sorry all my life. This ain't no new thing....I had a wife....Same thing. Ever'thing I done turned sour. She couldn't stand it any more...Same thing ever' place 'til I just got to clowning. I don't do nothin' but clown no more. Try to make the boys langh."(11)

Mack 等がわれわれよりもすぐれた点を持つことがないとなると，彼等がすぐれていることを前提としてこの作品に社会批判を見た Watt や Lester Jay Marks の論は成立しないことになるのである。

Cannery Row を "poisoned cream puff" と評した Malcolm Cowley の言葉を作者が認めていることや(12)，*Tortilla Flat* の Danny 等への賛美と同じ言葉が Mack 等に与えられていることや，「われわれがほめる親切や正直は現代社会では失敗の要素であり，われわれの嫌う貪欲や利己主義が成功の要素である」(13)という Doc の言葉などから，この作品にはかなり積極的な社会諷刺があると思われたのであるが，作品の現実は *Tortilla Flat* とは異って，社会諷刺は弱く，言葉の一部や，挿話に見られる程度であり，Lisca, French, Watt の論文が方向を変えて中間章や Doc の解説に移ってしまったのも理解出来るのである。*The Moon is Down* (1942) は観念過剰のセンチメンタルな失敗作であったが，この *Cannery Row* にもその観念過剰が尾を引いているのではなかろうか。社会諷刺の作品として見た場合，*Cannery Row* は残念ながら *Tortilla Flat* に及ばないと言わねばならない。

III

Tortilla Flat の hero は Danny 等であると言って差支えないが，*Cannery Row* の hero は Mack 等であると断言するのには問題がある。Mack 等が Doc のためにパーティーをやろうとして失敗し，2回目に成功するのを主筋として，その間に挿話的な中間章が入ると Lisca[14], French[15] 等は述べる。しかしその結果，挿話的中間章が如何に主筋に関連しているかの説明に苦労し，取って付けたように Doc の説明を始めるが，むしろ *Cannery Row* は，その冒頭に書かれるように Cannery Row の生活の物語と考え，さらにこの作品が捧げられた Ed Ricketts の人物画として捉えるべきであると思われる。

> Cannery Row in Monterey in California is a poem, a stink, a grating noise, a quality of light, a tone, a habit, a nostalgia, a dream. Cannery Row is the gathered and scattered, tin and iron and rust and splintered wood, chipped pavement and weedy lots and junk heaps, sardine canneries of corrugated iron, honky tonks, restaurants and whore houses, and little crowded groceries, and laboratories and flophouses....[16]

1930年に結婚して Pacific Grove に住み，Pacific Biological Laboratories を経営する Edward Ricketts と交際を始めて以来6年間親しんだ Monterey の Cannery Row が，*East of Eden* の冒頭の Salinas Valley の描写に劣らない愛情をもって先づ描かれるが，作者の愛情は場所よりもそこに住む人に，ことに浮浪者，売春婦など単純素朴な連中に注がれる。

> ...Its inhabitants are, as the man once said, "whores, pimps, gamblers, and sons of bitches," by which he meant Everybody. Had the man looked through another peephole he might have said, "Saints and angels and martyrs and holy men," and he would have meant the same thing.[17]

これは *Tortilla Flat* の Danny 等や *The Pastures of Heaven* の人々に注いだのと同じ愛情であって，海洋生物に興味を持つ Steinbeck が6章に描かれる Great Tide Pool の生物を観察する時のように道徳意識や善悪の判断なしに見た結果であり，Cannery Row の世界に悪が存在しないことを示すものなのである。

確かに，*Cannery Row* には親切な人々が沢山いる。grocery store を経営する Lee Chong は Mack 等が家賃を払わないのを知っていても倉庫を貸してくれるし，蛙の担保で Mack 等に貸した金を棒引にしてくれる。Doc は Mack 等や Dora の whore house の girls 達に親切で，金を与えたり，悩みを聞いてくれたり，また哲学，科学，芸術の源泉として教養を与えてくれる。また，Bear Flag Restaurant という whore house を経営する Dora Flood は親切

な女で，年令と病気であまり働けない girls をクビにすることはなく，大不況の時や，インフレンザが流行した時など，人々のために物心両面の援助をするのである。Mack 等も，つねに貧乏ではあるが，善意に溢れ，Doc の恩に報いるべくパーティを計画し，一回目は失敗するが二回目には成功し，Doc を喜ばすのである。

Cannery Row の主要人物が作るこの親切と善意の世界は，現実的にせよ，非現実的にせよ，それが具体的行動の描写を通して十分に描かれるとすれば，冷酷非情な本質を持つ現代社会に対して諷刺として機能する筈である。しかし，Lee Chong や Doc や Dora の親切な行為は説明として与えられるだけであり，Mack とその仲間や Dora の girls も，彼等が saints であり，angels であり martyrs であり holy men であると感じさせるほど dramatic に描かれることはなく，作者の意識にそのように映るだけであり，しかもそれは Ed Ricketts の意見を基礎としているのである。

> They were, as Ed said, the Lotus Eaters of our era, successful in their resistance against the nervousness and angers and frustrations of our time.
>
> Ed regarded these men with the admiration he had for any animal, family, or species that was successful in survival and happiness factors.
>
> We had many discussions about these men. Ed held that one couldn't tell from a quick look how successful a species is.[18]

つまり，Steinbeck の描く Cannery Row の物語は，行動描写の裏付けの不十分な，過度な善意に溢れた人々の物語であり，思い出の甘さに塗りこめられているようである。

Mack 等が Doc のためにやった2回目の成功したパーティーを Doc は喜び，宴の途中で "Black Marigolds" という詩を朗読するが，それが Dora の girls の涙をさそい，皆をしんみりさせる様子や，Doc が，翌日後片付をして，昨夜の詩の続きを読んで涙を流している様子に，Doc の，いや Steinbeck のセンチメンタリズムが象徴されていると言っても過言ではなかろう。その詩の最後の stanza にもその感傷はうかがえるのである。

> Even now
> I know that I have savored the hot taste of life
> Lifting green cups and gold at the great feast.
> Just for a small and a forgotten time
> I have had full in my eyes from off my girl
> The whitest pouring of eternal light—[19]

戦争に飽きた Steinbeck が戻って行ったのは海の青い Monterey の Cannery Row に住む人々だった。Doc を始め，Dora, Lee Chong, Mack 等が実在した人々であることは Ed Ricketts の事故死の後で書かれた "About Ed Ricketts" にうかがわれるが，強い個性を持ち，奔

放な生活をした Ed Ricketts が Doc として美化されているように，Dora も Lee Chong も思い出の美しさを与えられているようであり，ことに Mack 等は作者の心の中でセンチメンタルと言えるほどの溺愛を受けているのである。この作品は戦争からの relaxation として書いたという作者の言葉を Lisca は伝えているが[20]，Steinbeck 自身も同様なことを書いており，それが作品の甘さを説明するように思われる。

> Subsequently I saw a piece of war as a correspondent, and following that wrote *Cannery Row*. This was a kind of nostalgic thing written for a group of soldiers who had said to me, "Write something funny that isn't about the war. Write something for us to read—we're sick of war."[21]

IV

Cannery Row の構成について Steinbeck は海洋生物採集の比喩を用いて次のように述べている。

> How can the poem and the stink and the grating noise—the quality of light, the tone, the habit and the dream—be set down alive? When you collect marine animals there are certain flat worms so delicate that they are almost impossible to capture whole, for they break and tatter under the touch. You must let them ooze and crawl of their own will onto a knife blade and then lift them gently into your bottle of sea water. And perhaps that might be the way to write this book—to open the page and to let the stories crawl in by themselves.[22]

これは Steinbeck が *Cannery Row* を書くにあたって社会諷刺の意図がなかったことを示すものであるが，同時に Steinbeck が Cannery Row の詩的なムードを描こうという意欲のあることを示している。つまり，作者はしっかりとした筋を持つ作品というよりは散文詩を書こうとしているのである。この作品が細い糸のような筋しか持たず，挿話的中間章が多いのはそのためである。

Lisca の計算に従えば全部で 32 章のうち 15 章は主筋に関係がないということであるが，その 15 章をさらに調べると 6 章は少し関係があり 9 章は全く関係がないと言う。[23] French は主筋が述べられるのは17章または18章であると言ってその研究の精密さを示すが，[24] それでも曖昧性は残っている。French は言う。

> Some of the interchapters in *Cannery Row* are also very obviously related to the central narrative; but, since some employ the same characters, it is not, as Lisca points out, always easy to tell which are interchapters.[25]

Lisca と French は前述の精密さをもって中間章の意味を一つ一つ説明する。彼等は中間章は主筋の章と相互関係があるとか,[26] 作品の中心テーマについての anecdote である[27] と述べて説明に移るが，結果は多様な意味の羅列に終り論文に混乱をもたらしているだけである。

Cannery Row において，Mack 等は Doc のためにパーティーをしようとして失敗し，Doc の研究所をめちゃめちゃにしてしまうが，やがて Dora に励まされて二回目のパーティをやって成功し，Doc を喜ばせる。そして Doc はその親切と善意を何ものにも変えがたいものとして涙にむせぶのであるが，Steinbeck の描くその親切と善意の世界の底流には中間章に描かれる孤独があり，それが作品の世界に拡がりと深さを与えている。

Doc が孤独な人間であることに注意する批評家はあるが，その意味に関心を持つ批評家はない。だが，中間章の多くに孤独の風景があり，その中心に Doc がいることは認められねばならない。17章には Doc が孤独であることを述べる文がある。

> In spite of his friendliness and his friends Doc was a lonely and a set-apart man. Mack probably noticed it more than anybody. In a group, Doc seemed always alone. When the lights were on and the curtains drawn, and the Gregorian music played on the great phonograph, Mack used to look down on the laboratory from the Palace Flophouse. He knew Doc had a girl in there, but Mack used to get a dreadful feeling of loneliness out of it.[28]

Cannery Row では Doc は背景にいて表面に登場することは少ないが，登場する時はほとんど常に孤独のムードに包まれている。知能の高くない Hazel をつれて海洋生物の採集に行ったり（6章），低能の Frankie の面倒をみたりするが（10章），ある時500キロはなれた La Jolla の海岸で蛸をとっている時美しい少女の溺死体を見て，彼の耳にはフルートの美しい調がひびき続ける（18章）。

ここには *The Long Valley* (1938) の中の短篇 "The Snake" に描かれるのと同種の孤独がある。この孤独は California の田舎町 Monterey の寂しさの与える孤独のようであるが，アメリカ商業主義社会の底を流れる群衆の孤独である。4章の中国人の老人の物語は，その孤独を見事に表現している。毎日夕方に丘の上から下りてきて桟橋の下に消え，明け方に籠に何かを入れて，丘を上り二番街の或る門の中へ消える老人の姿はそれ自体深い孤独の印象を与えるが，その老人の目の中に Andy 少年は山の見える誰もいないさびしい田舎の草原を見てぞっとするのである。

またパーティーが好きで猫まで集めてパーティーをする24章の Mrs. Talbod の姿や，28章で，Doc にプレゼントをしようとして時計を盗んで捕まる Frankie の姿や，何回も妻に逃げられるボート住いの Henri の姿にも，孤独の影はつきまとうのであり，14章の兵士と女の子のエピソードに描かれる夜明けの Monterey の描写や，Holman のデパートの屋上の flag-pole

skater の他愛のない話（19章）にも田舎町 Monterey のさびしさは感じられるのである。

さらに26章の Joey と Willard の話や，12章の Josh Billings の話も，全体の寂しいムードを乱すものではないのである。

最終章で "Black Marigolds" の詩を読む Doc の姿はその孤独感の climax であるが，雌がいないために食物の豊かな Cannery Row の空地を去って，わなが仕掛けられてあるダリヤ畑に行く gopher の姿にも（31章）同じ孤独の影が感じられるのである。

中間章の挿話の大部分を流れる孤独の調べは Doc の孤独な姿と共鳴して，親切と善意でセンチメンタルに傾きがちな Mack とその仲間の物語に現実的な拡がりを与え，同時に詩的な陰影を与えているのである。

fabulous な場所であると Steinbeck の言う岬の突端の Great Tide Pool は，この作品の Doc にとってと同様に Steinbeck にとっても胸をときめかせる発見の場であったことは，6章の詳しい描写にうかがわれる。Stanford の学生時代から海洋生物学に興味を持っていた Steinbeck は，Cannery Row で海洋生物の標本を作る Ed Ricketts と知り合い，生物学的と言われる人生観を作り上げて行った。それは，Ed Ricketts と行った California 湾の採集旅行の記録である *The Log from the Sea of Cortez* に詳述される。客観的な観察に徹すると言いながら，実はその底に生命への尊敬，生物への愛情が存在している non-teleological thinking は Steinbeck の多くの作品の根底を作るのであるが，*The Pastures of Heaven* (1932), *Tortilla Flat* (1935) にはことにそれが明瞭である。単純素朴な人々の行動を，生物の行動を見守るように微笑をもって描いているのである。

Cannery Row の Mack とその仲間は，そのような作品の延長上の人物として同じような描写が与えられ，貪欲でなく，野心がなく，商業主義にまきこまれていないために精神の平和を持っており，その点で現代人及び現代社会への諷刺を漂わせていることは確かであるが，Steinbeck は Mack とその仲間と同様に Ed Ricketts や tide pool の思い出が書きたかったようである。その結果この作品は，Mack とその仲間の親切と善意の物語と，Doc を中心とする孤独な生活の物語の複合の形をとることになり，*Tortilla Flat* の諷刺よりは，Monterey の思い出が物語の支配的要素となり，思い出が持つ甘美な調べが，時にはセンチメンタルに流れるのである。

Monterey の思い出を Great Tide Pool の思い出と重ね合わせ，生物の生存競争の姿よりは，生物の生きる美しさを捉えようとしたこの作品は，*The Moon is Down* 以後の Steinbeck の作品を低下させた観念の過剰やセンチメンタリズムに汚され始めているとは言え，一応の統一された詩的感動を与えるのである。この作品を pastoral poem であるという Stanley Alexander の意見[29]は傾聴に値すると思われる。

注

(1) Warren French, *John Steinbeck,* p. 120.

(2) *Ibid.,* p. 135.

(3) Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck,* p. 199.

(4) F. W. Watt, *Steinbeck,* p. 80.

(5) *Ibid.,* p. 83.

(6) Lisca, *Wide World,* p. 199.

(7) French, *John Steinbeck,* p. 126.

(8) *The Short Novels of John Steinbeck* (The Viking Press), p. 278.

(9) *Ibid.,* p. 335.

(10) *Ibid.,* p. 335.

(11) *Ibid.,* p. 331.

(12) Lisca, *Wide World,* p. 198.

(13) The Short Novels of John Steinbeck, p. 336.

(14) Lisca, *Wide World,* p. 208.

(15) French, *John Steinbeck,* p. 122.

(16) *The Short Novels of John Steinbeck,* p. 273.

(17) *Ibid.,* p. 273.

(18) *The Log from the Sea of Cortez* (Heinemann), p. xxxiii.

(19) *The Short Novels of John Steinbeck,* pp. 360～361.

(20) Lisca, *Wide World,* pp. 198～199.

(21) *Steinbeck and His Critics* (Univ. of New Mexico press), p. 39.

(22) *The Short Novels of John Steinbeck,* p. 274.

(23) Lisca, *Wide World,* p. 208.

(24) French, *John Steinbeck,* p. 122.

(25) *Ibid.,* p. 123.

(26) *Ibid.,* p. 124.

(27) Lisca, *Wide World,* p. 210.

(28) *The Short Novels of John Steinbeck,* p. 317.

(29) Stanley Alexander, "*Cannery Row:* Steinbeck's Pastoral Poem," *Steinbeck,* ed. Robert Murray Davis.